研究ノート

箱清水期における土器廃棄の一様相

青木　一男

はじめに
1　松原ムラの土器廃棄・遺棄
2　廃棄パターンD類の諸例と内容
3　共飲共食儀礼の結果としての廃棄
おわりに

はじめに

箱清水式土器様式は，中部高地北域における弥生時代後期社会の地域色を示していると多くの先学が指摘してきた。私ども長野県埋蔵文化財センターは，上信越自動車道建設に伴う長野市松原遺跡の調査で，箱清水期に位置づけられる小単位集落址の調査を実施した。(1) 筆者は，報告書刊行過程で，当該期の住居址埋土内から多量に土器が出土した206号住居址の位置づけが気がかりであったが，その内容と憶測を示すまでには至らなかった。そこで，当研究ノートでは土器廃棄の一様相について提示し，その内容に秘められた事象を整理することによって，今後ムラの構造を紐解くための布石としたい。

1　松原ムラの土器廃棄・遺棄

（1）　廃棄・遺棄の類型化

松原遺跡の弥生時代後期集落址の調査では，22軒の竪穴住居址と1基の井戸を検出した。(2) 旧河道の窪地に囲郭された空間に展開する集落で，時間的には箱清水II式2段階(3) に位置する。調査は高速道幅の範囲で行われ，集落の大半が調査できたものと思われる（第2図）。

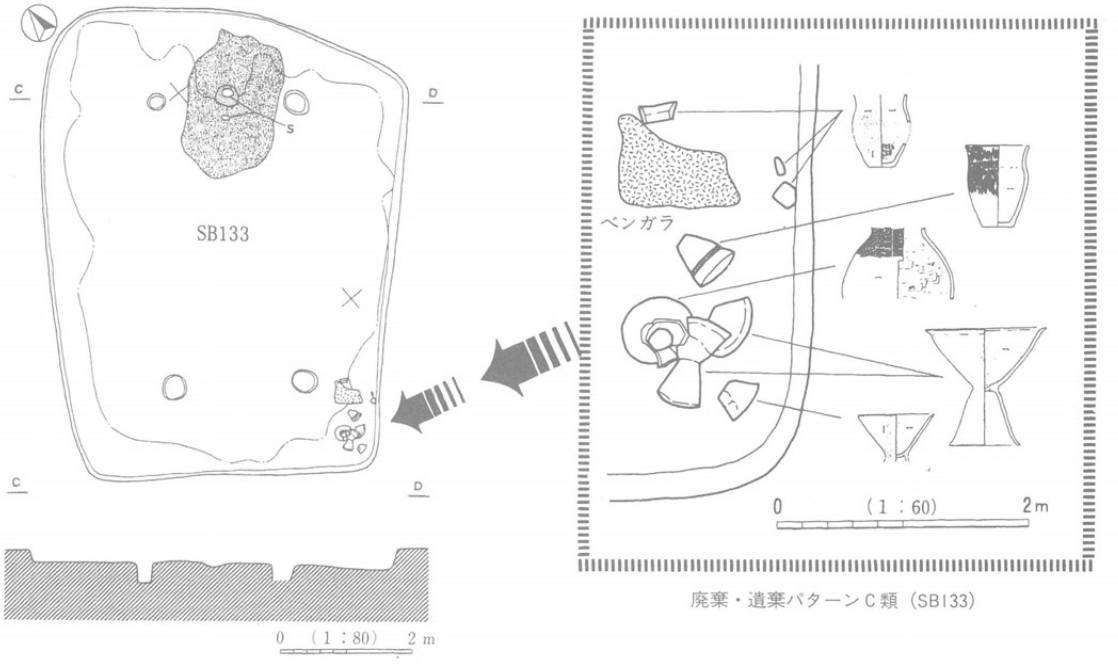
同集落址では，他の集落址と同様に，竪穴住居址の埋土内から土器を主体に遺物が出土したが，その廃棄および遺棄の状況には諸例が認められた(4)。以下，土器の出土状況に関してA～D類に類型化する（第1図）。

A類．埋土中から土器がほとんど出土しないか，破片資料が若干出土するもの
（SB131，132，140，141，154，157，171，205）

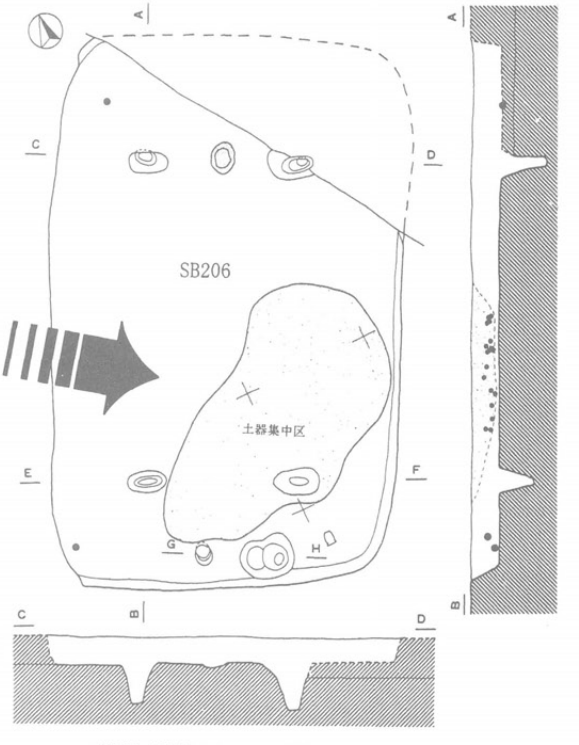
B類．土器片が床面より浮いて，破損状態で散在して出土するもの
（SB71，135）

C類．床面近くに破損した遺物が散在したり，完形に近い土器が出土するもの
（SB133，134，153，172，204）

D類．埋土上層あるいは床面から，炭化粒・焼土粒を含む層に伴って多量の土器が出



廃棄・遺棄パターンＣ類（SB133）



廃棄・遺棄パターンＤ類（SB206）

第１図　廃棄・遺棄パターンＣ・Ｄ類

土するもの
(SB206)

A～D類の出土状況は，出土量という観点から区分すると，その量的なる比はD＞B・C＞A類となる。D類の遺物量は，調査段階で多量のコンテナを必要とし，A類ではコンテナ１箱に満たない。松原遺跡でD類の出土状況を示した竪穴住居址は１軒のみで，A・B類の占める割合が高い。A・B類の出土状況を示す竪穴住居址は，その出土量から意図的な遺棄あるいは廃棄が行われなかった可能性が高い。一方，器形の残存率という観点から区分すると，残存率の高い割合は C・D＞B＞A類となる。C・D類とB類に認められる差は，C・D類では完形個体に復元できる個体数の割合が，後者のB類に比べて高いことである。このことは，C・D類の出土状況が一定の意図で，廃棄・遺棄された結果であると読みとることができる。そこで，出土状況の類型であるA～D類について，廃棄・遺棄パターンの類型に置きかえて考えてみることにする。

C・D類の具体例を検討してみよう（第１図)。D類の廃棄・遺棄パターンを示した206号住居址では，70個体の土器を図版に提示し，14個体が完形に復元ができた。甕の復元率が高く，壷，高杯の復元率は低い。壷，高杯は，完形に復元できた２点以外に底部から口縁部に至るまで復元できたものはなく，廃棄に至る経過で，意図的な打ち欠き行為があり，廃棄場所を分散している可能性もある。また，その出土量から，すべての土器が通常の206号住居内で用いられたものとは考え難く，日常の住居内使用土器とは別の土器群も廃棄されたと見た方が自然である。

C類の廃棄・遺棄パターンを示したSB133，153，172では，床面からまとまった遺物の出土があり，住居廃絶時における遺棄の様子を窺い知ることができるが，共通現象として，入口右側コーナーの床面にまとまって土器が埋置される。SB133では19個体の土器を図版に提示したが，完形の高杯，脚部を打ち欠いた高杯口縁部，胴下半部を打ち欠いた壺，完形の小型甕が床面直上に遺棄され，床面の一部にはベンガラが散布されていた（第１図)。他のSB153，172でも，欠損部をもつ壺が正位に据え置かれ，その周囲に完形の高杯あるいは鉢，小型甕が埋置されていた。それぞれの個体が完存して検出される出土状況は，土器が一度に埋められた経過を物語っている。こういった埋置は，箱清水様式期の集落ではしばし認めることが出来るが，D類の出土量および内容と比較すると，竪穴住居内で用いられた土器が遺棄されたものと理解できる。

松原遺跡の竪穴住居址出土資料の廃棄・遺棄パターンについてA～D類に類型化し，C・D類の具体例について概観した。同集落址の廃棄・遺棄パターンは，出土量が少ないA・B類のパターンが主体である。その中でD類の廃棄パターンは22棟中１軒のみで，竪穴住居址機能時に用いられた土器群とは機能的に異なる器が多量に廃棄されること，C類は数棟あり，竪穴住居址機能時の器が住空間の機能停止時に埋置されたであろうことを予察した。

（2） 廃棄・遺棄パターンC・D類のあり方

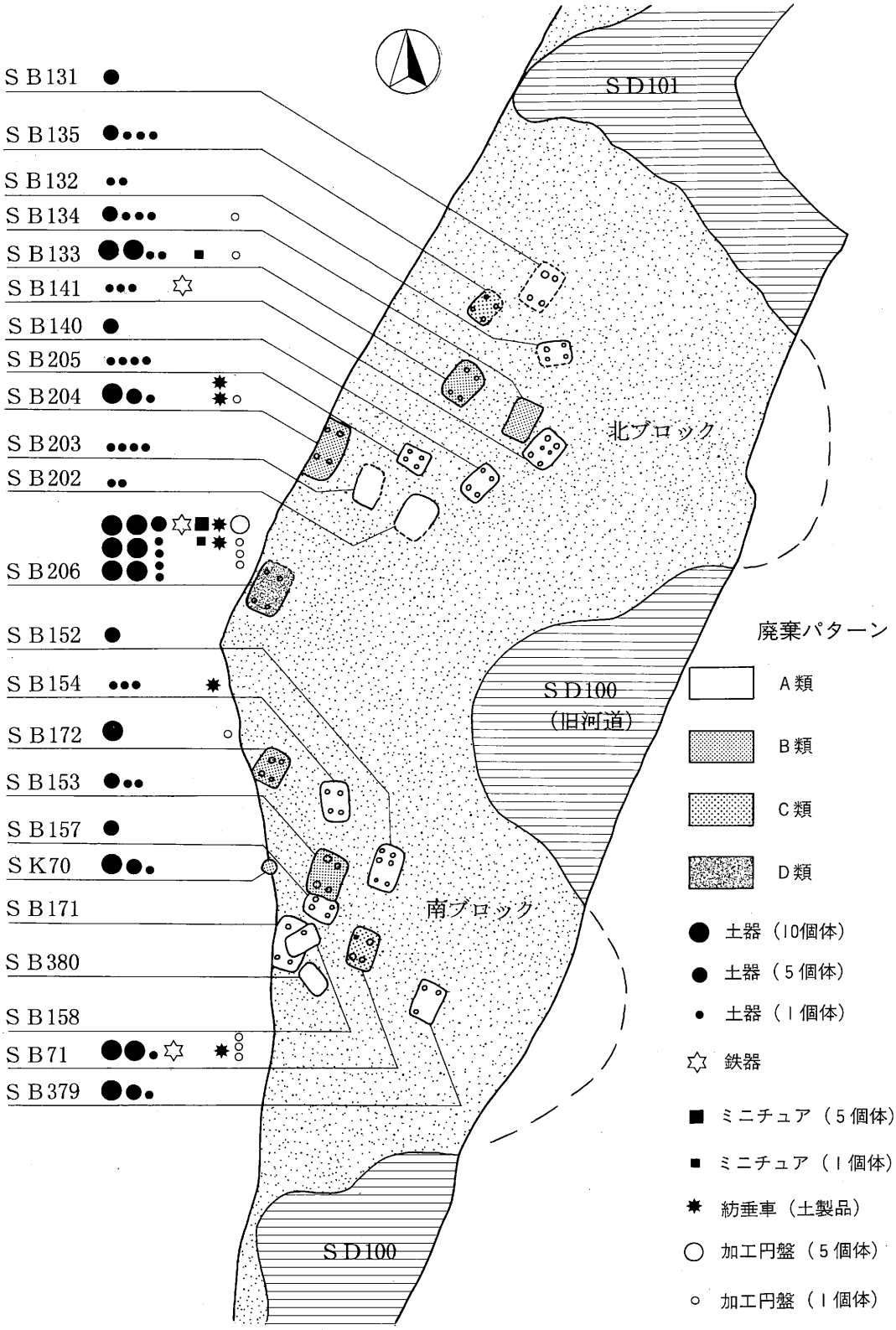
C・D類の廃棄・遺棄パターンを示す竪穴住居址について，集落内の位置を考えてみることにしよう(第2図)。松原ムラの竪穴住居址群は，南北2つのブロックに集塊状に散在する。D類のSB206は北ブロックの南端に位置し，北ブロックと南ブロックの中間に位置する。近接するSB204に次いで松原ムラでは二番目に広い床面積をもつ竪穴住居址である。一方，埋置土器を有するC類は，SB133が北ブロック，SB153，172が南ブロックに位置し，SB133，153に関してはブロック内では大型の住居址で，SB172は通常の規模である。また，C類の住居址から特別な遺物の出土はない。

松原集落では22軒の竪穴住居址のうち，C類のパターンを示した住居は5軒，D類のパターンを示した住居は1軒で，集落内中央部に位置し，床面積では二番目の規模である。C類も大型の住居にめだつが，特に集魂することはない。C類とD類の遺物量についてはC＜Dであることは前述したが，D類の出土状況を示す竪穴住居址の遺物は多量の焼土粒，炭化粒を含んだ層より出土している点が異なる。D類の廃棄パターンには火が焚かれるという行為が伴っており，その後に土器を中心とした遺物が廃棄されている。SB206では土器以外の遺物として，鉄製やりがんな1本，高杯，鉢，臼，筒型容器等を範型にしていると考えられる5㎝程の手ずくね土器（ミニチュア）5点，土製紡錘車2点，土器片転用加工円盤9点，動物の歯1点が出土した。これらの遺物のまとまりは，C類ならびに他の住居址にも例はなく，特殊な出土状況を示している（第7図)。

C・D類の竪穴住居址への遺物廃棄・遺棄の諸例を検討する中で，筆者は竪穴住居址が機能を停止した段階で埋め戻されているのではないかという憶測をもつようになった。多量の遺物が出土したD類のSB206では，上層では炭化粒と伴に多量の土器がレンズ堆積をしていた（第1図)。この現象は，SB206が機能を停止した段階で上屋が解体され，竪穴が埋め戻される過程でその窪地に土器が廃棄されたものか，機能停止から一定時間が経過した後，竪穴の埋没あるいは陥没に伴う窪地に土器が廃棄されたという両者の考え方が成り立つが，筆者は前者ではないかと考えている。一方，C類のSB133等でも床面に遺棄された土器の状況から竪穴住居址の埋め戻しを指摘してきた。

A～D類の土器廃棄・遺棄の諸例は，竪穴住居址の機能停止段階から埋没段階までの過程と密接なかかわり合いをもつ。機能停止時に竪穴住居廃絶に関わる意識的な遺物の廃棄・遺棄が行われた場合，C・D類という現象が生れることになろう。一方，竪穴住居址の埋め戻しも完全に埋め戻すとは限らないし，埋め戻してもレンズ状に陥没していく。この段階で，竪穴住居址廃絶行為とは無関係な遺物の廃棄が行われると，A・B類という現象が生れるであろうし，自然に流れ込みがあればA類になるものと思われる。これらのことからも，C・D類廃棄・遺棄パターンを示す竪穴住居址には，住居廃絶段階に意図的な遺物廃棄が行われたことが指摘できる。

松原集落では，2つのブロックに区分されうる集塊的な竪穴住居址のまとまりで，大型住居に位置づく竪穴住居址上層に多量の土器が焼土粒・炭化粒を含む層に廃棄されていた。その廃



第2図　松原集落と遺物出土内容

棄パターンをD類として類型化したが，住居廃絶時に意識的な埋め戻しを指摘し，意図的な土器廃棄行為を想定した。

2　廃棄パターンD類の諸例と内容

（1）　事例の検討

箱清水様式期の集落におけるD類の廃棄パターンの諸例について検討し，土器廃棄・遺棄の背景を紐解くための整理をしてみたい（第3，4図）。

①　松原遺跡206号住（第3図）

箱清水II式2段階の集落に位置する大型の竪穴式住居址で，長軸8.6m以上，短軸5.4mを測り，同集落では2番目に大きな規模である。床面は堅緻で，炉が1基確認される。主柱穴の掘り方は長方形プランをなし，その形状から主柱は割材の板材であったと想定できるが，松原遺跡では唯一の例である。

遺構の埋土と遺物の出土状況は，埋土上層に多量の土器片が炭化・焼土粒を含んだ層より出土した。調査者は，埋土上層の多量の土器と床面上に遺棄された土器に型式的な変化がないこと，下層土層が単一層であることから「住居は意図的に埋め戻されたもの」と推定する。土器類の外には鉄製やりがんな片1，小型土器5，土製紡錘車2，土器片加工円盤9，動物の歯が共伴した。

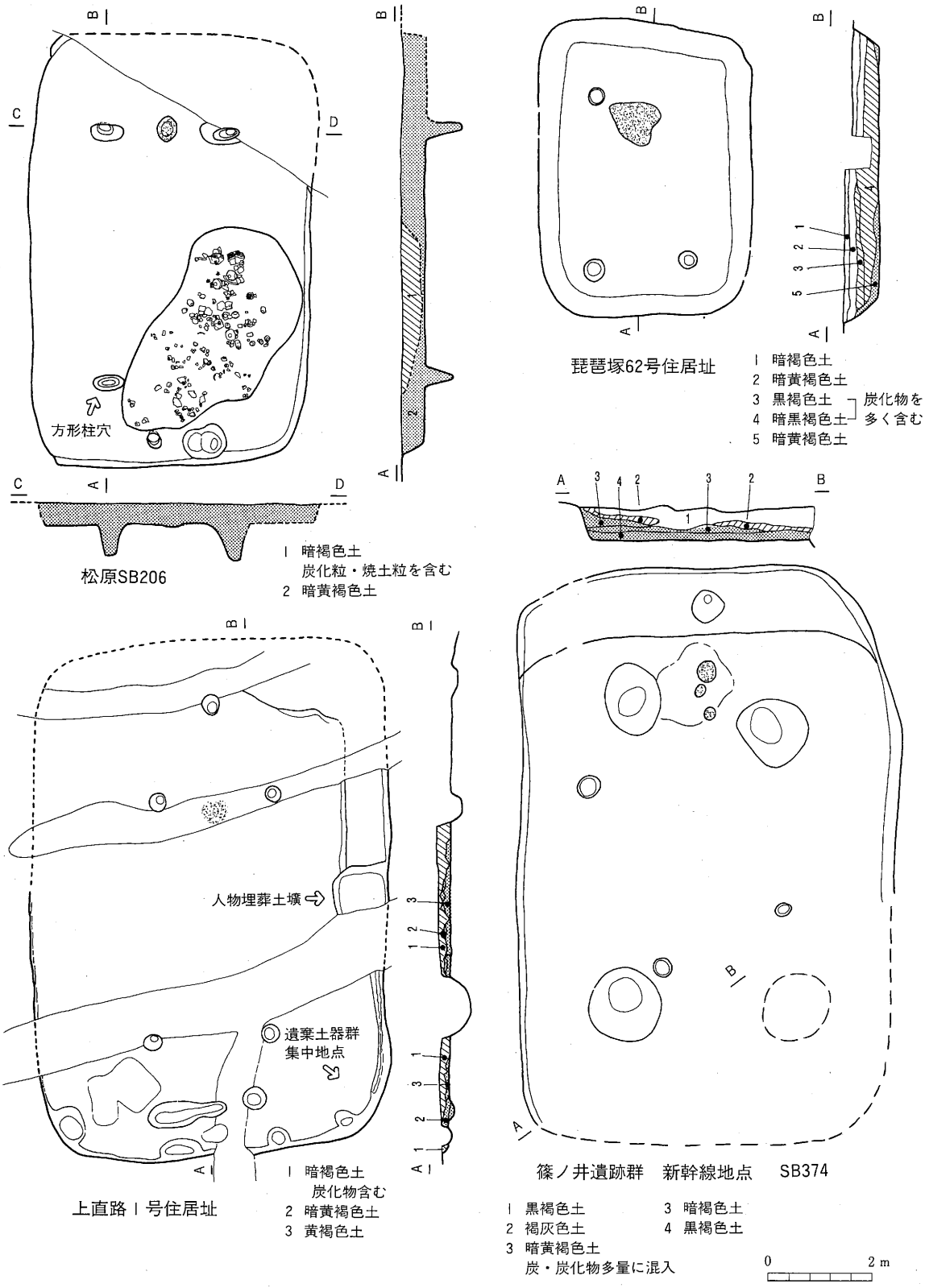
②　篠ノ井遺跡群新幹線地点374号住[6]（第3図）

新幹線工事に先だち調査された篠ノ井遺跡群の一地点で，箱清水II式1～3段階の集落と墓域が調査された。同住居址は，箱清水II式2段階に位置づけられ，長軸約10.2m，短軸6.2mを測り，床面は拡張，貼り替えが行われ，炉が3基認められる。調査区内ではII式2段階の竪穴住居址が6軒集魂するが同住居址は最も規模が大きく，4m離れて井戸SE201が接している。調査者は「住居廃絶後，土器投棄施設となったらしく，覆土全般にわたって膨大な量の土器が出土している」と報告する。埋土は4層に区分され，灰・炭化物を多量に混入する中間層の2層はレンズ状堆積を示し，中央部では4層直上の第2床面に接している。遺物は中央部に集中し，出土状況写真でも中央部で床面に接し，周辺部では浮いている事が理解できる。このことは出土土器の多くが2層に帰属することを示している。調査者は，住居廃絶と土器廃棄に時間差を考え，大量の土器は「本跡への帰属性は薄い」と考えたが，筆者は，最下層3層土が人為的に埋め戻されたと考え，住居廃絶と土器廃棄の同時性を仮定したい。

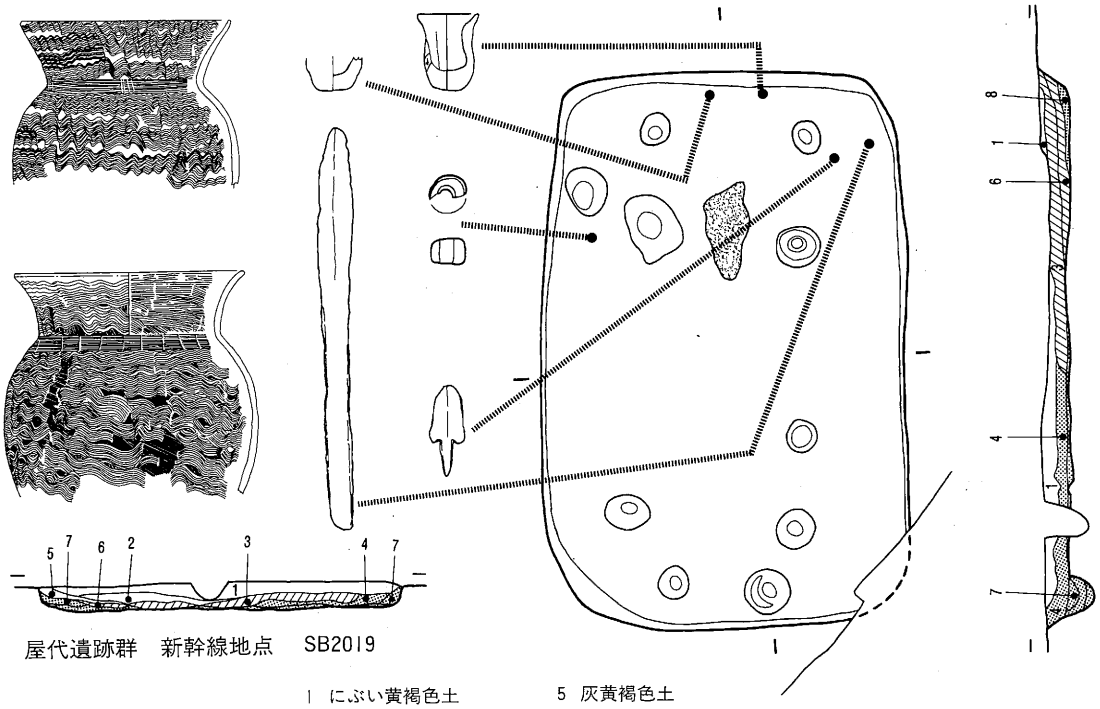
出土遺物には土器，銅釧1，ガラス小玉，置き砥石，獣骨（鹿―下顎骨，距骨，肩甲骨，上腕骨，馬―大腿骨）がある。これらの出土層位は明確にされていないが，筆者は，中間層2層から出土したものと想定し，住居址が埋め戻される過程の窪地で火が焚かれた後，破砕された土器群と伴に遺棄された遺物と考えている。

③　琵琶塚遺跡62号住[7]（第3図）

上田市，塩田平に位置する浦野川流域には琵琶塚，上田原遺跡等，箱清水II式から御屋敷期の集落群が形成される。琵琶塚62号住居址は箱清水式II式2段階の竪穴住居址で，長軸約5.9



第 3 図　土器出土パターンD類の竪穴住居址(1)



第4図　土器出土パターンD類の竪穴住居址（2）

m，短軸4.2mを測る。隅丸長方形のプランを呈し，中規模の建物である。掘り込みは約54～74cmと深く，床面は堅緻，炉址は明確ではないが3ヶ所の焼土部分が確認された。

埋土は5層に区分され，一次堆積土の5層暗黄褐色土の上位には炭化物を多く含む黒褐色系3～4層が厚く堆積している。同住居址からは，遺物コンテナ10箱以上にのぼる土器が出土したというが，その出土状況についての説明はない。写真図版の遺物出土状況写真を解析するならば，土器は破損状態で床面から浮いており，厚くレンズ堆積をする様子が窺える。土器出土状況写真では，1～2層と想定される上層には遺物が確認できない。多量の遺物は炭化物を多く含む埋土中層3～4層から出土したものと思われる。一次堆積土の5層に炭化物が認められないことが重要である。土器以外の遺物では鉄斧1，銅釧1，ガラス小玉1，磨製石鏃1，1孔石庖丁1，手ずくね土器が出土した。

④　屋代遺跡群新幹線地点2019号住[8]（第4図）

新幹線工事に先立ち調査された屋代遺跡群の一地点で，箱清水II式3段階の集落が一部調査された。SB2019号住居址は，長軸約8.6m，短軸5.7mを測る隅丸長方形の住居址で，大型の住居に属する。

埋土は7層に区分され，調査者は自然埋没と考えた。壁際に一次堆積土の4～8層のレンズ

状堆積があり，焼土・炭化粒は含まない。住居址北側では，炭化物を多く含む３，６層が住居址中央部に向って斜位に堆積し，一次堆積土８層上に乗っている。また，６層は，主柱穴Ｐ２の掘り方内最上層に流入している。この流入は主柱穴を抜き取った際その窪地に堆積したもので，住居廃絶と６層土の堆積に時間差がないことを物語っている。

埋土中の遺物は「全般に多く，奥壁付近と入口付近に多い」という。土器は甕を中心とし，残存率は高くない。３，６層が厚く堆積する北側奥壁部では，特異な遺物がめだち，銅鏃１，鉄製鉈１，ガラス小玉１，石製品１，手ずくね土器２が出土している。出土層位は明確にされていないが，焼土・炭化粒を含む３，６層に帰属するものであろう。

⑤　上直路１号住居址[9]（第３図）

佐久市湯川流域の岩村田・琵琶坂遺跡群に位置し，２軒の竪穴住居址が調査されている。１号住居址は箱清水Ⅱ式１段階に位置する大型住居址で，長軸10m，短軸７m前後を測り，佐久地方最大規模であるとともに，銅釧14～15点を身につけた人物が屋内埋葬されていた建物として注目される。

竪穴住居址の右側長辺中央部では，壁際の床面に1.6×1.3m，深さ0.2mの土壙があり，内部より火熱を受けた人骨および木棺の痕跡が明らかとなった。埋葬された人物は両腕に銅釧を装着する。棺の脇には３点の甕が正位に，１点の高杯が逆位に据え置かれていた。

入口右側コーナーの床面上には，15点以上の土器が遺棄され，壺，高杯を中心に完存するものが多く，押し潰されたかのような状態で出土した。床面と棺に伴う土器群は同型式で，床面上に残された土器群は銅釧を装着して埋葬された人物の埋葬行為と密接に関連するものと思われる。

住居址埋土は，上層の暗褐色土と，下層の黄褐色土からなり，炭化物は１層暗褐色土に含まれる。建物の機能が停止した段階で，上屋は解体され，埋葬行為が執り行われ，その後，棺および遺棄された土器群が埋め戻されたものと思われる。

（２）　廃棄・遺棄土器群とその内容

箱清水期におけるＤ類の廃棄パターンについて，松原遺跡SB206を代表に管見にふれるところをとりあげた。箱清水期の集落を調査すると，多量の土器を出土する竪穴住居址が少数ながら存在し，土器群は焼土，炭化粒を伴う層から出土する。この廃棄パターンＤ類の土器群および遺物の検討を行い，廃棄に関わる諸行為を想定したい。

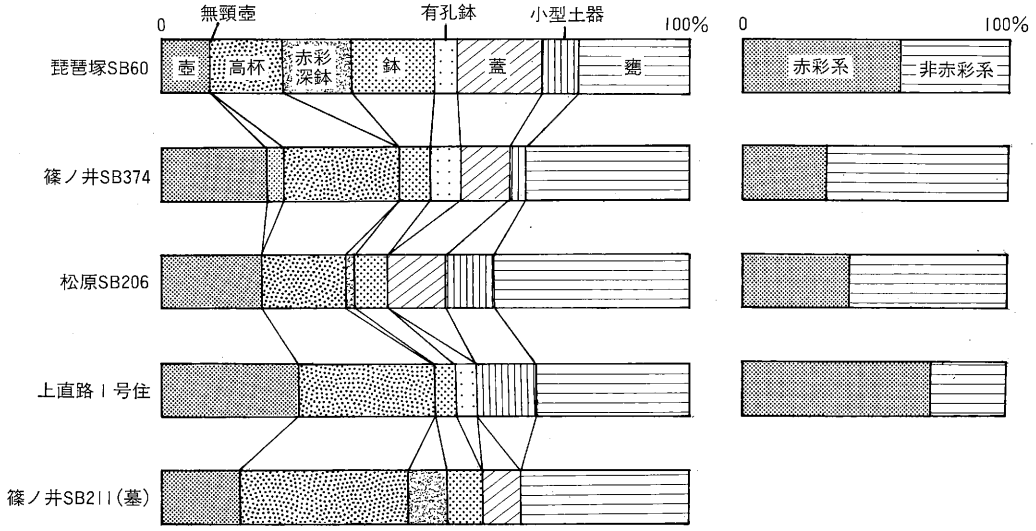
第１に，その出土状態が問題となる。炭化物・焼土粒を含む層から多量に出土する土器群は，大きく２つの形態が認められる。ひとつは松原遺跡206号住居址例（第６図）であり，破損した破片が堆積し，個体に復元できないものが主体となる。個体に復元できるものも散乱状態の場合が多く，出土状況から接合図を作成すると網目状になってしまう。篠ノ井SB374住居址，琵琶塚60住居址はこの形態であろう。他のひとつは上直路１号住例であり，調査段階で個体の認識が可能で，個体に復元されるものが多い。発掘現場で出土状況図が作成され，報告書でその図が提示される。

松原型のパターンは，土器が使用された行為事態が終了した段階で，土器は打ち欠き破砕し，

建物空間の外部から廃棄した可能性が高いが，上直路型のパターンは，土器が出土したその場で使用された可能性が強く，使用行為が終了した段階で破砕行為は行われずに遺棄されたものであろう。その際，いずれの場合も火を焚く行為が大量土器廃棄・遺棄に関連していることを注意しておかねばならない。廃棄・遺棄と火焚き行為の時間的な関係は，廃棄行為では火焚き行為の後に竪穴内に土器がなげ込まれており，遺棄行為では，遺棄を行った後火焚き行為が執り行われている。このことは，土器を用いた何らかの行為を復元する際に重要である。

第2に，出土した土器群の器種組成を示してみたい(第5，6図)。構成は箱清水式土器様式のすべての器種に及び，特に欠落する器種はない。各事例によって構成差が認められるもの，壺，高杯，鉢類等の供献にかかわる器種が40～50%，特に高杯は10～20%と割合が高い。また，甕が20～30%を占めている。赤彩を施すことが多い供献具の割合が高いことは重要であるが，煮沸具である甕の存在も見逃すことはできない。廃棄・遺棄された土器を用いた行為には，甕の使用が大きく関わりをもちそうだ。供献具を用いる行為と同等に煮炊き行為も行われた結果が器種組成に反映しているものと考えられる。甕による煮炊き行為と火焚き行為との関連を指摘することができる。

第3に，多量の土器群の他に，鉄・青銅製品，ガラス製品，石製品，土器片加工品，小型土器，獣骨等が出土する。鉄・青銅製品は加工具，武器，装身具がある。加工具では松原，屋代で鉄製やりがんな，琵琶塚で鉄斧が，武器では屋代から銅鏃が，装身具では篠ノ井，琵琶塚，上直路で銅釧が出土した。ガラス製品では若干のガラス小玉が篠ノ井，屋代，琵琶塚で共伴した。石製品には採集具，武器，装身具がある。琵琶塚では1孔の石包丁，磨製石鏃，鉄石英製細型管玉が出土した。土製紡錘車および加工円盤，手ずくね土器を中心とする小型土器類も散見される。これらの遺物の出土から，D類の廃棄とは，単に土器の廃棄・遺棄行為とは考え難く，鉄，青銅製品，ガラス製品等を用いた諸行為がその背景に秘む結果生じたものであろう。非日常具

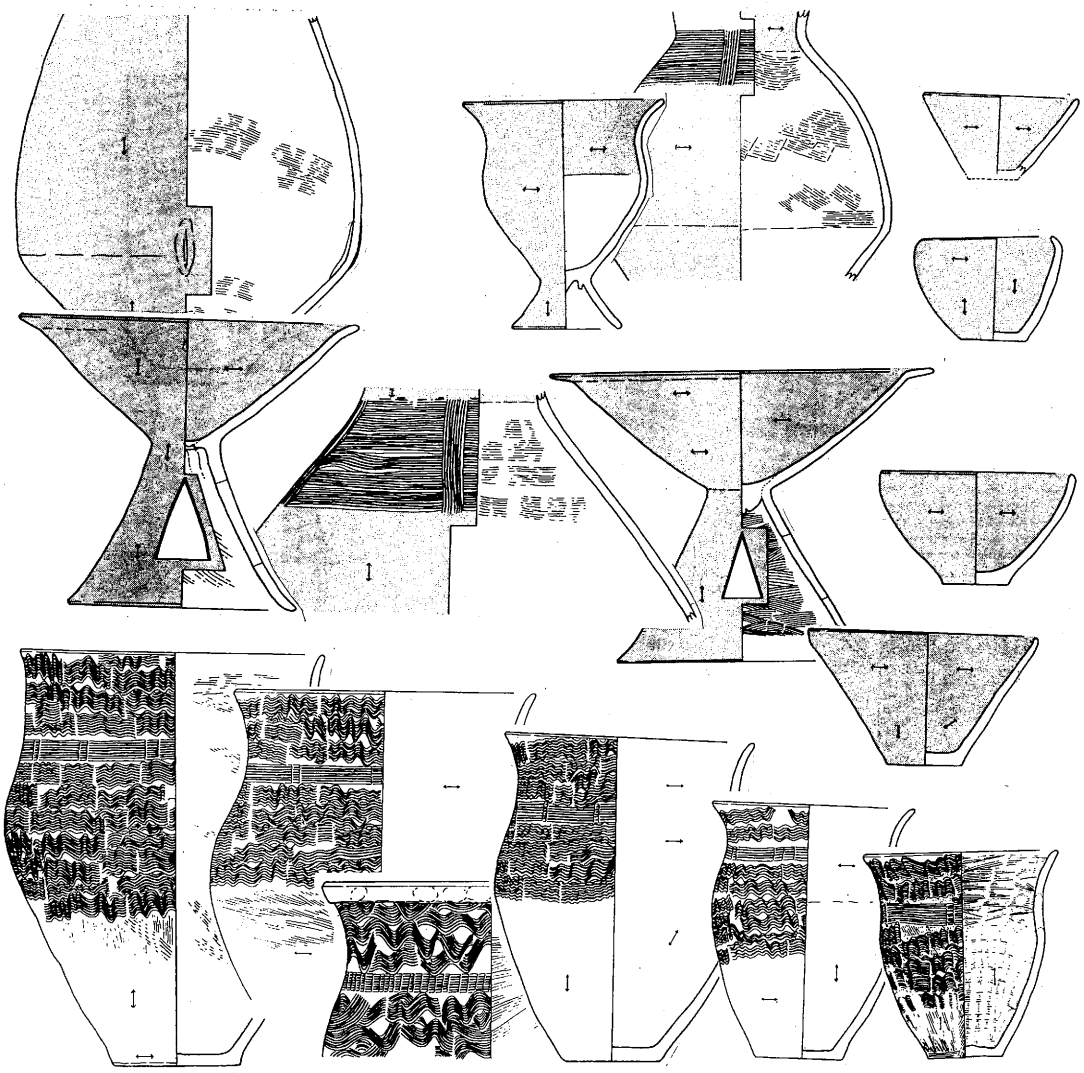


第5図　D類出土土器の器種組成

とも解釈が可能となる遺物群は，多量の土器と比べるとその量はごく僅かなものであるが，バラエティーに富むことも注意しなくてはならない。当該期の墓地からは，鉄・青銅の鏃，釧，ガラス小玉，管玉類の出土は認められるが，他の遺物の出土例は稀であり，D類出土パターンにおける土器以外の遺物の内容は，背後の行為が一様なものではなかったことを物語っている。

3　共飲共食儀礼の結果としての廃棄

竪穴住居址埋土内より焼土・炭化粒を伴って多量の土器が出土するD類の廃棄パターンは，当竪穴住居址に関連する意図的な廃棄であること，遺物群が住居址上層で出土する際は竪穴住居址の意図的な埋め戻しが行われたであろうことを述べてきた。この意図的な廃棄とは何かと



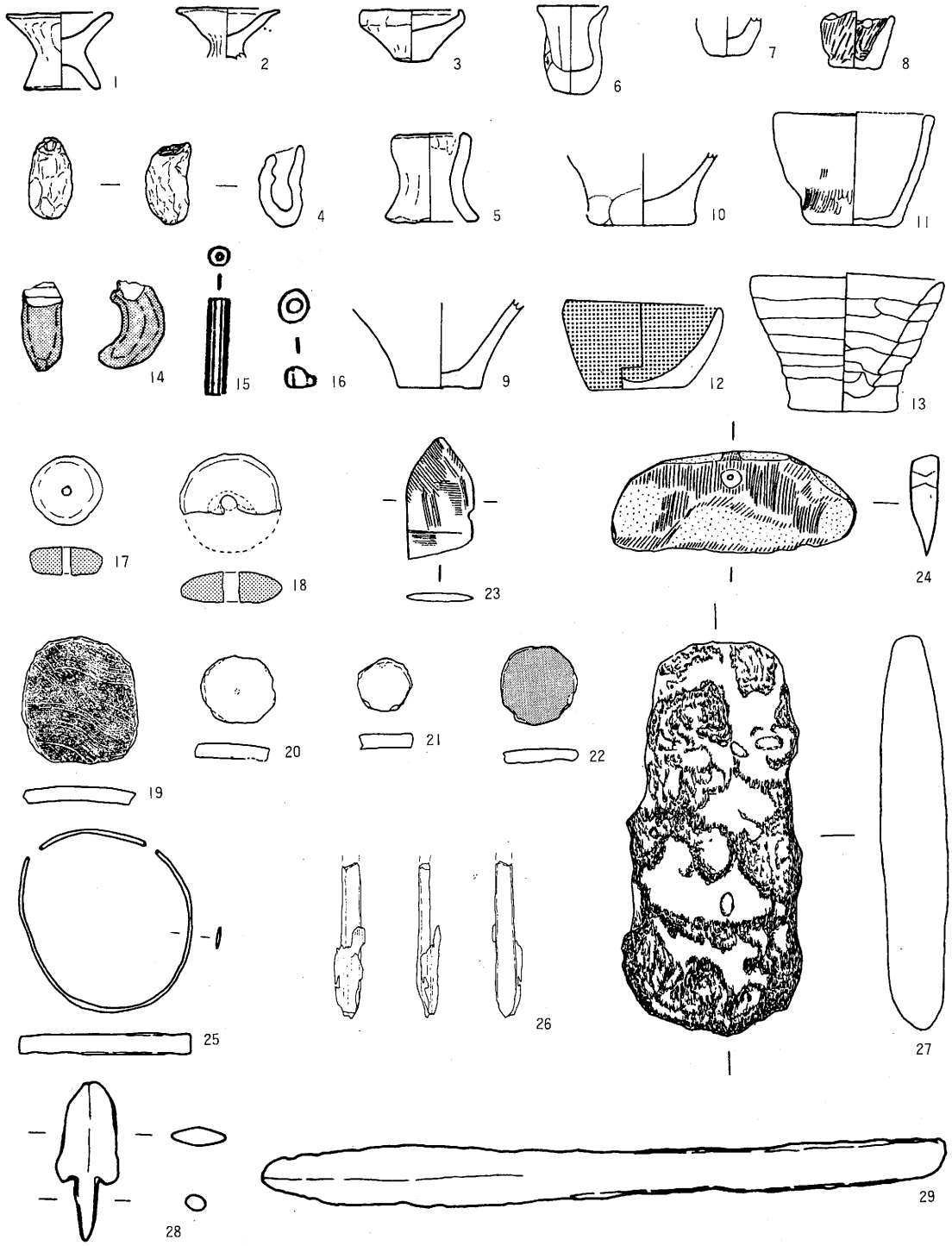
第 6 図　SB206出土土器群（S＝1/6）

いうことについて私見をのべてまとめとしたい。

D類の廃棄・遺棄パターンには＜火を焚く＞という行為が関連している。その行為も一様ではなく，松原，琵琶塚遺跡のように機能を停止した竪穴住居址を埋め戻し，その窪地で火焚き行為を行った後に土器を廃棄する場合と，上直路遺跡のように機能を停止した竪穴住居址内に土器を遺棄して埋め戻し，火焚き行為を行うという場合があるようだ。いずれも，竪穴住居址機能停止段階に，a埋め戻し行為，b火入れ行為，c土器の廃棄あるいは遺棄行為が執り行われている点が指摘できる。先に，松原遺跡のC類パターンでは，ここでいうところの火入れ行為が認められないことは前述した。

火入れ行為には，特殊な遺物と多量の土器が伴う(第6，7図)。多量な土器とはあくまでも集落内における相対比なのであるが，私どもは時に報告書の図版でその情報を見失いがちである。篠ノ井遺跡新幹線地点374号住居址出土資料は，報告書図版で35点の土器が提示されているが，報告者は「覆土全般にわたって膨大な量の土器が出土している」と報告する。多量の土器廃棄を追う場合，報告されない土器をも考慮して考えねばなるまい[10]。多量廃棄される土器群は，松原206号住居址，琵琶塚62号住居址資料を分析すると，煮沸具である甕が一定割合を占めて法量別のセットを構成している（第6図)。また，松原206号住居址では煮沸具の量が一竪穴住居址で消費する甕の量をはるかに越えていること（第5図）が重要で，廃棄前に多くの人々が関わる煮沸行為が執り行われたことを物語っている。器種組成としては，赤彩器種である壷・高杯の占める割合がいずれの事例でも高い（第5図）ことが特記され，特に壺は重視されている。筆者は，箱清水式土器の赤彩壺はカミ祭りの用具ではなかったかという憶測をもっているが，ここでは本題でないのでふれないことにする。[11]

D類の廃棄パターンに伴う多量の土器とは，複数の構成員による共飲共食儀礼行為の結果生まれたものであろう。埋土内に認められる焼土粒・炭化粒は，儀礼行為に伴う火焚き行為を物語っており，土器の主要構成を占める煮沸具は，儀礼行為に基づく煮沸行為に関連して人々によって持ち寄られ，非日常化した容器となった結果廃棄されたものと考えたいのである（第6図)。その結果が廃棄パターンのD類現象となっているとみたい。松原遺跡では，大型の竪穴住居址の廃絶に伴って，1軒のみD類の廃棄パターンが認められた。206号住居址は集落中央に位置する建物であるが，この建物の廃絶にかかわる共飲共食儀礼は，小単位集団の存続にかかわる儀礼ではなかったろうか。松原遺跡の小集団は，箱清水II式2段階にムラを機能させているが，同II式3段階には当地点からムラは移動しており，次に当地点にムラが営まれるのは土器の中に小型精製3種が共伴する古墳時代前期のことである。あえて憶測を語るならば，小単位集団の集落移動に際し，中核機能を維持したであろう大型建物を舞台に儀礼が執り行われ，構成員の紐帯を保ったのではなかろうか。一方，上直路遺跡では集落の全体像は明らかでないが，大型住居の廃絶に伴って，銅釧を15点装着した人物が同建物内に埋葬され，土器の廃棄パターンではD類の行為が実施されている。この事例も集落単位の存続と密接に関わる現象と見たいが，そのきっかけは銅釧を装着した人物の死がかかわっているかもしれない。15点の銅釧を装着した人物が，集団内に位置していたであろう現象も重要である。



第 7 図　D 類に認められる土器以外の遺物

小型土器(S＝1/3) 1～5・9 松原　6～7 屋代　10 篠ノ井　8・11～13 琵琶塚　**装身具・土製勾玉**(S＝1/1)14 篠ノ井　15～16 琵琶塚　**紡垂車・加工円盤**(S＝1/3)17～22 松原　**石製品**(S＝1/2)23・24 琵琶塚　**鉄・青銅製品**(S＝1/2)25 篠ノ井　26 松原　27 琵琶塚　28～29 屋代　〈25・28 青銅器〉

D類の廃棄パターンは，集落内でも大型建物に認められることが多い。大型建物の集落内における機能的な役割をも物語っているともいえる。上直路1号住居址では，その建物で主たる活動をした人物が埋葬されたのだろう。一方，松原遺跡では同様な大型建物が，小集団の竪穴住居址群内部に位置し，この住居址のみにD類の廃棄パターンが認められた。D類の廃棄パターンに対してC類のパターンは，集落単位に対して竪穴住居内消費単位の構成員による家屋廃絶儀礼とみたい。その行為には，火を伴う共飲共食儀礼の痕跡が廃棄パターンからは認められない。松原遺跡では4軒の竪穴住居址にC類の廃棄パターンが認められたが，これらの住居址の出土遺物に関して複数の構成員が儀礼にかかわった痕跡はなく，特異な遺物の出土もない。このことからも，D類の廃棄パターンと多くの構成員との関係が示唆されるのである。

集落内土器廃棄の一様相に，集落構成集団による共飲共食儀礼を予察した。ここでいうところの共飲共食儀礼については近藤義郎博士の概念規定に多くを学んだが,「農耕集落での収穫祭における神々との共飲共食儀礼」「亡き首長の霊との共飲共食儀礼」とは，儀礼の形態が若干異なるもの，行為の背景に同様な現象が秘んでいると考えたい。(12) 同儀礼行為が小集団内の紐帯を強めるために有効であったことは充分想像できることである。この場合，同パターンに伴う特異な遺物である鉄，銅，ガラス製品等の意味，大型住居址の位置づけは重要で，箱清水期の集落内構成員の紐帯を紐解くための材料ともなろう。集落内廃棄パターンD類から垣間みえる箱清水期小単位集団の紐帯は，その構成員間の緩やかな結束が見えかくれする。稀少なるものを保持し，集団内からかけ離れる構成員および家族の姿はみえにくい。中部高地北域における弥生時代後期社会の集落内構造を問う窓口が，土器廃棄という側面からも追究できるのではないかという考え方を示して今後の課題としたい。

おわりに

憶測を語るあまりに，貴重なページ数を費やしてしまった。私どもは日々の業務で発掘調査および報告書作成を行う。その中で，報告書作成がすべての終了でないことは誰もが認めることである。先輩方が創刊した「長野県埋蔵文化財センター研究紀要」は，そういった願いに支えられ，今日まで研究誌として継続している。諸先輩方が現場から学び叙述してきたように，その追試を行おうと考えているのだが，自ら発掘調査をした現場の解釈でさえ不備な感はいなめない。内容的には本誌にそぐわないものになってしまったかもしれないが，中部高地北域の弥生時代後期から古墳時代に関する地域色について，今後も調査していこうと考えている。

註・参考文献

（1）　青木一男ほか　1998年　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5　松原遺跡　弥生・総論6　弥生後期・古墳前期』　長野県埋蔵文化財センター

（2）　前掲註(1)

（3）　ここで示す土器編年は，下記の文献で提示した編年観に基づいている。

青木一男　1999年　「長野盆地南部の後期土器編年（発表メモ）」『シンポジウム長野県の弥生土

器編年発表要旨』長野県考古学会弥生部会

（4）　廃棄，遺棄，埋置という用語については，きちんとした定義づけを行っている訳ではない。土器の機能が停止し，竪穴住居址埋土内に土器をおきざりにする場合，その行為自体の意味が強い順に①埋置→②遺棄→③廃棄としてとらえている。現象として，土器の完形率は①＞②＞③となり，①は床面に近い位置に認められることが多い。当研究ノートではその定義づけが不充分であるが，いずれ報告書等で定義づけを行いたい。

（5）　類例は長野市・本村東沖遺跡23号住居址，篠ノ井遺跡群高速道地点 SB6015，7079，7488，塩崎遺跡群 Ⅳ 15号住居址等に散見される。いずれの場合も壺の胴上半部を床面上に据え置く現象がめだつ。

（6）　田中正治郎　　1998年　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 4　篠ノ井遺跡群 石川条里遺跡 築地遺跡　於下遺跡　今里遺跡』長野県埋蔵文化財センター

（7）　塩崎幸夫ほか　　1989年　『琵琶塚Ⅱ　小泉地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』上田市教育委員会

（8）　澤谷昌英　　1998年　『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 3　更埴条里遺跡　屋代遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

（9）　佐久市教育委員会　1997年　『佐久市埋蔵文化財年報 6 』

(10)　篠ノ井遺跡群新幹線地点 SB374例に限らず，私どもは「膨大な量」と思える遺物が検出された場合，その内容を図版と文章で説明する。しかしながら，どういった基準で図版に提示する遺物を選び出し，不足・欠落したデータをどう表現するかと問われた場合，あいまいな提示が多いことも確かである。

(11)　箱清水Ⅱ式の壺は定形化が著しく，赤彩率がきわめて高い。法量の分化も進むが，器高50cm以上の超大型壺が増加し，貯蔵具という機能のみでは説明が難しい。一方，壺は完存する例は稀で，破損状態で出土し，復元してもどこか欠落してしまう例がほとんどである。壺は機能停止時に打ち欠きされるものとみたい。

(12)　近藤義郎　　『前方後円墳の時代』岩波書店

近藤義郎ほか　　1992年　『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会